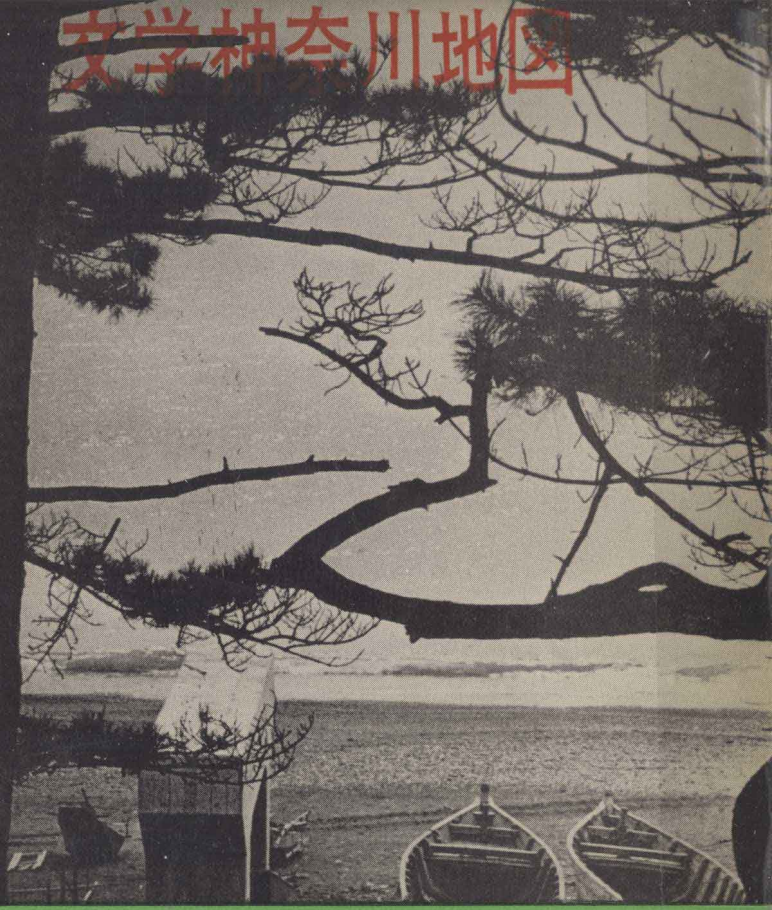
文学神奈川地図



神奈川を舞台に、人生哀歓の機微を描く名作の数々・われらの郷土に生まれた文学案内書

明治・大正・昭和の **神奈川文学**

県民必読の書／有隣堂・定価 600円

神奈川新聞社編

文学神奈川地図

昭和四十四年十二月一〇日　印刷
昭和四十四年十二月二十五日　発行

文学神奈川地図

定価　六〇〇円

（検印廃止）

編集　横浜市中区太田町二ノ二三
神奈川新聞社

発行　横浜市中区伊勢佐木町一ノ四ノ一
株式会社　有隣堂
代表　松信泰輔
電話横浜（261）二二三一
振替口座　横浜　二〇三

印刷　横浜市南区前里町二ノ四四
三信印刷所

序にかえて

「水色の鎌倉山の秋風に　銀杏ちりしく石のきざはし」これは鎌倉の鶴ケ岡八幡宮の石のきざはしを詠んだ与謝野鉄幹の歌である。

承久元年一月、新春拝賀の式を終えて下向する実朝が、この石段の途中で、銀杏の陰から襲いかかってきた公暁のために敢えない最後をとげたところである。

鉄幹の歌は、この大銀杏が黄葉を夕陽にかがやかせて舞い散るさまを一気に詠んだものであろうが、さらにそれを承久の昔にだぶらせて事件を想起するとき、大いなる歴史が実感として感得することができる。僅か三十一文字にすぎない歌でありながら、芸術の力の偉大さ、深奥さをつくづくと感嘆させられる。

それと同じように、われわれが普段何気なく見のがしている風物や生活環境も、それが作家の筆にかかり、作中の人物の点景としてとりあげられると、きわだって特異な印象をうけることがある。それはときに限りない親しみとなり、あるいは、全く新しい発見となることもある。

今回、神奈川新聞の編著として刊行されることになった「文学神奈川地図」は、さきに同紙の学芸欄に連載されたのを一本にしたものであるが、私はこれが掲載当時、毎回心待ちして愛読したものである。その理由は、前にあげたような事由にもよるし、また本県がこれほど文芸作品の舞台になっていたのか、という再認識と喜びによるものであった。

私もかつて青春時代、文学に憧がれ東西の名作に読みふけったことがあるが、その中のいくつかはこの編中にもとりあげられている。しかし、それ以外の作品で、今回初めて、その概容にふれ、その背景に湘南の海や、箱根や、発展途上にあった当時の横浜、川崎、小田原などの生き生きとした描写と、人生模様を味読することができたのは大きな幸いであった。

この書を、単なる神奈川にゆかりのある文学ダイジェスト版とせず、学生生徒諸君にはよき文芸作品の手引き書として、また一般の読者には名作鑑賞の一書として愛読されることをおすすめしたい。

昭和四十四年　冬

神奈川県知事　津田文吾

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目次

序にかえて　神奈川県知事　津田文吾

放浪記　林芙美子　1
おせい　葛西善蔵　4
真鶴　志賀直哉　8
遠来の客たち　曾野綾子　11
春昼　泉鏡花　14
トロッコ　芥川龍之介　17
田園の憂鬱　佐藤春夫　20
剣ケ崎　立原正秋　24
虫のいろいろ　尾崎一雄　27
春　島崎藤村　31
午後の曳航　三島由紀夫　35
門　夏目漱石　39
湿原植物群落　高見順　42
忘れえぬ人々　国木田独歩　45
霧笛　大仏次郎　48
鶴は病みき　岡本かの子　52
太陽の季節　石原慎太郎　56
ゼーロン　牧野信一　59
潮風　里見弴　63
山の音　川端康成　66

箱根山　獅子文六　69
海に生くる人々　葉山嘉樹　73
ハコネ用水　タカクラ　テル　76
波　山本有三　80
電車を降りて　永井龍男　83
葉山一色海岸　有馬頼義　87
少女図　八木義徳　90
或る女　有島武郎　93
鳳仙花　川崎長太郎　97
不如帰　徳富蘆花　100
道化の花　太宰　治　103
軍港行進曲　宇野浩二　107
痴人の愛　谷崎潤一郎　110
砂の上の植物群　吉行淳之介　114
滑川畔にて　嘉村礒多　118
青　年　森　鷗外　121
由利旗江　岸田国士　125
沃　土　和田　伝　128
無限抱擁　滝井孝作　131
曙　町　田中英光　134
駅前旅館　井伏鱒二　138
相模国愛甲郡中津村　松本清張　141
破　船　久米正雄　144
花　影　大岡昇平　147
黄金伝説　石川　淳　151
鎌倉夫人　深田久弥　154
陰気な愉しみ　安岡章太郎　158
灯台へ　堀田善衛　162

かめれおん日記　中島　敦　166
友　情　武者小路実篤　169
くれない　佐多稲子　172
愛と誓い　武田泰淳　175
雨　北原武夫　178
最初の秋　山川方夫　182
湖　畔　結城信一　185
朱を奪うもの　円地文子　189
海の色　広津和郎　192
昭和の日本人　山口　瞳　196
春は馬車に乗って　横光利一　199
過去の夕景色　舟橋聖一　203
華　燭　中山義秀　206
耽　溺　岩野泡鳴　209
花冷え　瀬戸内晴美　212
結婚記念日　井上　靖　216
かんかん虫は唄う　吉川英治　219
乗合馬車　中里恒子　223
寿福寺　高浜虚子　227
明治太平記　海音寺潮五郎　231
野の少女　島木健作　235
矢の津峠　金　達寿　238
冷　笑　永井荷風　242
人間嫌い　正宗白鳥　246
青　年　林　房雄　249
煉瓦女工　野沢富美子　253
風にそよぐ葦　石川達三　256
居留地　長谷川伸　260

真　珠　坂口安吾　263
安宅家の人々　吉屋信子　267
海を見ていたジョニー　五木寛之　270
運　河　丹羽文雄　274
あとがき　神奈川新聞編集局長　山上　貞

『放浪記』　林　芙美子

横浜で女給に

――陽春の山下公園を散策――

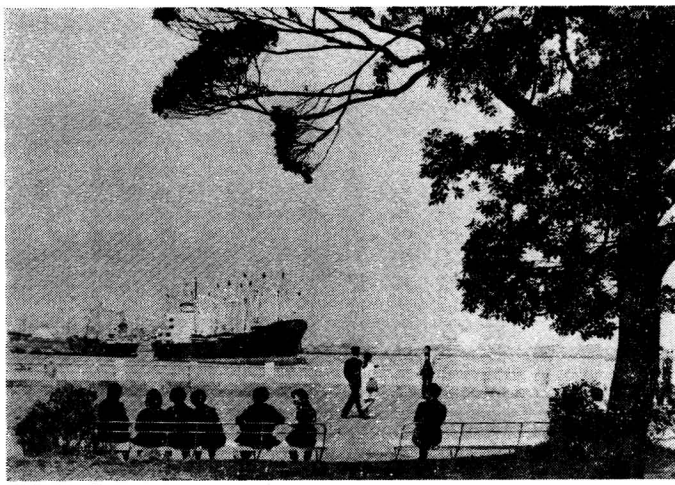
『放浪記』――文字どおり林芙美子の出世作であり、代表作である。

『私は宿命的に放浪者である。私は古里を持たない』。父は四国の伊予の人間、母は九州の桜島の温泉宿の娘、母は他国者と一緒になったというので故郷を追われ、二人は下関に落ち着いた。『私の生れたのはその下関の町である。――故郷に入れられなかった両親を持つ私は、したがって旅が古里であった』

このような書き出しから『放浪記』は始まる。下関から尾道・東京・房総……作者の放浪は続く。お金と幸福を求め、職業を転々と変えながら、貧しく苦しい旅が続く。

『放浪記』を通読してみて、横浜のことが二回出てくることに気がつく。

『（十二月×日）お君さんが誘いに来て、二人は又何かいい商売をみつけようと、小さい新聞の切抜きをもって横浜行きの省線に乗った。



山　下　公　園

（四月×日）横浜に来て五日あまりになる。カフエー・エトランゼの黒い卓子の上に、私はこんな詩を書いてみた。

――その夜
カフエーの卓子の上に
盛花のような顔が泣いた
何のその
樹の上にカラスが鳴かうとて……』

さらに、同僚のお君さんと彼女の子供の三人で港へ出かける場面もある。

『私たち三人は手をつなぎあって波止場の山下公園の方へ行ってみる。赤い吃水線の見える船が、沖にいくつも碇泊していた。インド人が二人、呆（ぼ）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

んやり沖を見てゐる。蒼い四月の海は、西瓜のような青い粉をふいて光っていた。』

年譜をみると、昭和三年、作者二十五歳のとき『三上於菟吉の推薦で、彼の妻の長谷川時雨の主宰していた女人芸術の第二号から放浪記を五、六回連載し、好評を受けた』とある。本になったのは昭和五年（二十七歳）で、改造社から出された『放浪記』がベストセラーになったため、つづいて『続放浪記』が出版されている。

なお、その前の大正十二年、二十歳のとき『愛人を失なった寂寥（せきりょう）も手伝って、日記をつけ出した。後の放浪記である。』とあるから、著者は旅の行く先々で思ったこと、体験したことを詩にし、日記に書きとめておいたものとみえる。『放浪記』には著者自身の詩のほか啄木の詩がかなり引用されている。著者のさびしい感懐を託するに詩がもっとも適した表現形式だったのだろう。

『花の命は短かくて　悲しきことのみ多かりき』

林芙美子は三十代、四十代とさかんな創作活動をしたが、昭和二十六年六月二十八日、数え年四十八歳でこの世を去った。

はやし・ふみこ　明治三十六年、山口県下関市生まれ。尾道高女卒業後、文字どおり放浪生活を続けながら創作に手を染め、戦後の名作に『晩菊』『浮雲』『めし』などがある。昭和二十六年六月死去。

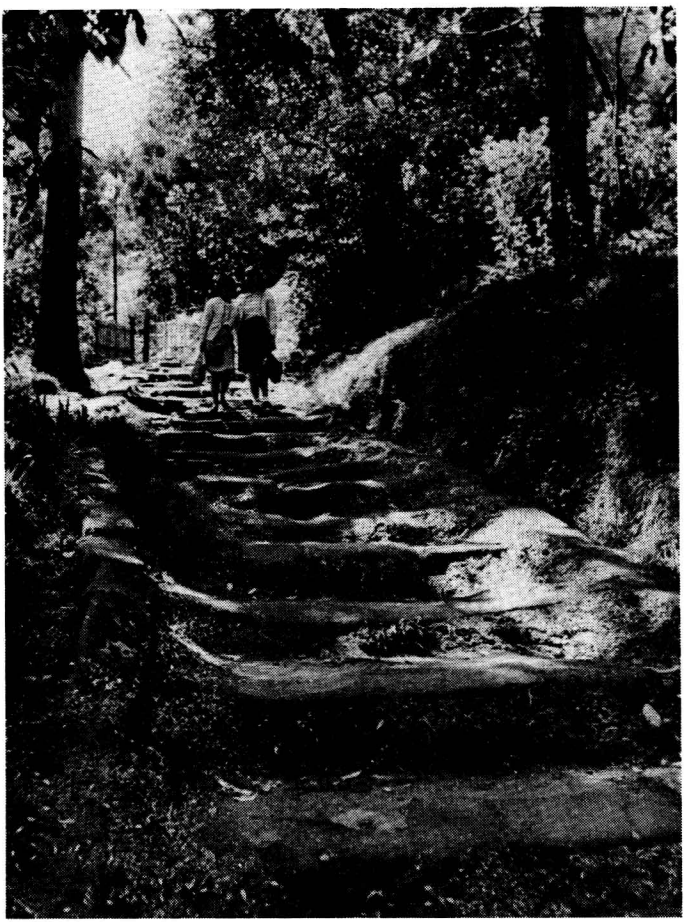
『おせい』　葛西　善蔵

鎌倉の片すみで創作

――食事を運ぶ娘との交流――

最近急に車の往来が激しくなった鎌倉街道すじから鎌倉五山第一の寺院、建長寺の大きな山門をくぐると境内に桜が満開で〝古都の春〟をうたっていた。ガイド嬢に案内された団体客、若いグループ、寺めぐりらしい老人たち――春は平日でも日に三千人の見学者でにぎわうという。が、これらのなかで、いまから五十年ほど前、この境内の片すみに〝大正文士〟の典型といわれた弘前生まれの特異な私小説作家葛西善蔵が住み、病と貧窮のなかで創作の悩みに明け暮れていたことを知る人は少ない。葛西が大正八年末から関東大震災の十二年まで約四年間を過ごした宝珠院は半僧坊へ曲がる道の手前、左側の杉木立ちの上にあって、彼はここの『天井の高い終日、日のささないひどく湿ける寒い部屋』で『春』『不良児』『朝詣り』『本来の面目』『父の出郷』など暗いため息にも似た短編を書きつ

「おせい」　葛西善蔵



宝珠院への石段道（建長寺境内）

づっていた。『おせい』というのは彼の部屋まで毎日食事を運んでくれる境内の茶店の娘との交流を描いた小品で、筋とてもない散文だが、彼の作品のなかでは珍しく〝人をほっとさせる〟暖かみをもっている。

初めて見たとき『おせいは二十で背丈の低い肥えた頬の赤い娘で……幾らかお凸の額の下の小さな眼を臆病らしく輝かして私にお辞義をした』――〝暗い部屋にて〟――。

それから『山の上の部屋借りの寺へ高い石段を登り降りして三度三度ご飯を運び晩は晩で十二時近くまで私の家に退屈な晩酌のお酌をさせられる』ことになったおせいだが、それが雨・風の日も変わりなくまる三年も続いたとき「私」は〝貧乏、病気、癇癪、怒罵〟――あらゆるそうしたものを浴びせた自分を恥じ、変わらぬおせいの心をいとおしく思う。そして、『長編ができたら借金を返し、おせいちゃんにお礼をする』といったかと思うと自分のためにおせいの青春をつぶしてしまっては――などと考えたりする。しかし病気で倒れた私を看病した彼女は明るく「私」をいたわってくれた。

『どこへ出かけるにもおせいは私の薬を飲むための魔法ビンを肩にさげさせられた。そうした彼女の姿を私は遠い郷里（津軽）の山の中へ置いて頭の中に描いて見た』――小説『おせい』はこう終わっている。

「おせい」　葛西善蔵

宝珠院は震災で昔の姿を失ったが、杉・ヒノキの若葉に日をさえぎられた五十段もの古い石段は人通りも少ないのか、石は朽ち、青ゴケもはえて当時そのまま。静けさのなかに食膳を運ぶおせいの足音が聞こえて来るようであった。彼女の家、宝珠院から三百メートル離れた招寿軒は四十年の火災で焼失後、やはり半僧坊への道の途中に仮設され、いまはハイカーでにぎわうが付近の茶屋はここと二軒きり。『七、八軒の茶屋が低い松葺の軒を並べて江の島式の寄ってらっしゃいをくり返していた』昔の面影は消えていた――。小説の『おせい』はその後葛西善蔵夫人となり、最後まで世話をした浅見ハナさんのことで、彼の代表作のひとつ『椎の若葉』も、その〝おせい〟の家とのトラブルが主題となった作品である。

かさい・ぜんぞう　明治二十年、青森県弘前市生まれ。大正元年、処女作『哀しき父』を早稲田派同人誌に発表してデビュー。代表作は『放浪』『椎の若葉』『湖畔日記』芸術至上主義に徹し、大正文士の一典型といわれた。昭和三年七月死去。

『真鶴』　志賀　直哉

少年の淡い恋物語

――小田原辺へかけて冬の夕暮れ背景に――

『真鶴』は少年の淡い恋物語である。少年は『真鶴の漁師の子で、色の黒い、頭の大きい子供』だ。

かれはある日、父からもらった歳暮のお金でゲタを買おうと、弟と二人で小田原まで出かけ、町角で三人づれの法界節の一行に会う。一行は夫婦と子供らしく『四十位の眼の悪い男が琴をならして居る。それからその女房らしい女が顔から手から真白に塗り立てて、変に甲（かん）高い声を張り上げ月琴（げっきん）を弾いていた。もう一人は彼と同じ年位の女の児で、これも貧相な顔に所まだらな厚化粧をして、小さい拍子木を打ち鳴らしながら、泣き叫ぶように唄っている』。

少年はその月琴をひいている女に魅せられ『嘗（かつ）てこれ程美しい、これ程に色の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.